



＜ホーム＞世界＞インド「ダリットたちの尊厳回復プログラム」報告5

一緒に歩もう！一緒に変わろう！「立ち上がった世界の人々」の21世紀の夢を応援しよう！

プログラム内容
2010年9月

報告1
10月

報告2
11月

報告3
12月

年間レポート
2011年9月

報告4
12月

報告5
2012年1月

報告6
3月

報告7
6月

報告8
10月



現在

抑圧された人々、ダリットたちの尊厳回復プログラム

南アジア・インド北部

インド文化における尊厳回復

12月の始め、インド北部の7つほどの村から16人のダリット出身のリーダーたちが、尊厳回復の真の意味を深めるための継続研修に集まった。

今回は始めに、アイデンティティのことが熱心に語り合われたという。外見や使う言葉などから人のアイデンティティを判断するインド文化に生きる時、同じダリットたちの間でも、自分をどのように表現するか常に考えさせられる。だから、集まってきたリーダーたちの姿も、男性の場合、ひげを蓄えているかないか、蓄えている場合は長さ、そして服装まで多岐にわたって自分のアイデンティが表現、主張される。創造主への祈り、世界や社会への願いや思い、自分たちの決意を表現する音楽での表現も、彼らにとって大切なアイデンティティの一部なのだ。



社会慣習上、今まで人間以下という最底辺に落ちこめられてきたとしても、彼らはインド文化に生まれ、生かされている人間だ。その文化の素晴らしさを他の人々のように味わい、自分たちの表現手段として用いる権利を持つ。彼らの尊厳回復は、インド風音楽を奏でることも含めて、生きていくうえでのあらゆる領域にまたがっている。

リーダーとして、トータルに変革された人と社会のビジョンを深める

リーダーの一人、キショルさんは、人が本来の姿に回復して欲しいと心から願い、長い年月、人々の間で働いてきた。けれども、この研修を受け続けて気づかされたことがあった。自分が関わってきた一人ひとりが日々、暮らしている村や町がトータルに回復されるとは何か、とは今まで一度も考えたことがなかった、ということ。だから、人が本来の姿に戻って生き生きとして欲しいと願っていたにもかかわらず、彼が願う本来の姿での村での生き方が見えてこないのが、協力してくれる人がとても少なかったことが判ったのだ。

また、今までインド社会のなかに存在してきた「カースト制度」について、その起源や意味、また、何が根本的な課題なのかを教えられたことはなかった。それがやっと、すべての人を当然のように社会的にランクづけ、自分たちダリットが人間以下とされ虫けら同然に扱われるのは、本来の造られた姿ではないのだから、社会の課題として声を上げていかなければならないことを理解したのだ。

キショルさんはこう語った。「この研修会で何よりもうれしいのは、自分と同じようなことを目指している人たちに出会えたことだ。自分が心を燃やすビジョンを共有できるのは、とてもワクワクする！」

もう一人のリーダー、ゴウタムさんは自分にとってのこの研修会の意義をこう語った。「自分のやり方だけを信じて独自に、細々とした人数ながら今までやってきた。この研修でビジョンを共有する同志に出会い、自分がこれしかないと思っていたやり方も他のアプローチがあることを知り、実践するようになった。すると、地域で共感して参加する人々が、次々と起こされるようになった！」

2人のリーダーとも、この地域のダリットたちのもっとも緊急のニーズは、子どもも大人も文字の読み書きを習得することだ、と口をそろえる。そして読み書きの習得は、非常に早い時点で達成できると希望を持っている。

トータルな変革とは？

インド文化に生きる人々にとって、トータルな変革の意味を理解し適用することは簡単なことではない。どのリーダーも長い格闘が必要であることを認めている。たとえば参加者のひとり、タレワルさんは自分にとってとても重要な質問を投げかけた。「私は厳格な菜食主義者だが、他の人々ともっと交流するために、野菜以外も食べたほうがよいのだろうか。」インド文化の根幹の一つとも言える菜食主義のあり方や、それを基にして階層関係が生じることなど、議論は噴出した。インド文化と捉えるのか、階層関係維持のためのシステムなのか、簡単には答えが出ない課題であることを人々はあらためて認識したのだ。



計画立案:新たな社会変革の渇きを覚えて

継続研修の最終日に、未来に向かって計画を立てることになった。人と社会をトータルに変革するというビジョンを土台として計画を立てたことがなかったため、いざとなると、何からどのように手をつけたらいいのか、戸惑ってしまったという。けれども、この研修会を通して、参加したリーダーたちは、あらためて人が本来の姿に立ち返り生きる意味を見出して生きていくこと、そして、インドの村や町という地域社会の負の部分がかつトータルに変えられていくことへの深い渇きを感じた、と感想を述べた。具体的かつ長期的には、社会慣習としてのカースト制度、数々の迷信、そして、文字の読み書きができないことを廃絶するための一歩を踏み出そうと決意した。「人と社会のトータルな変革」という見方は、非常に重要であることを全参加者が感じ、継続的に学ぶ必要を確認して継続研修を要請した、という。

参加者たちの横顔

小規模農業、仕立て屋、さまざまな自営業。それぞれの地域で、誠実な商売をしている彼らは定評があるという。稼ぎはわずかだが、それでも地域の必要のため資金や資源を提供し、地域変革に誠意を注いでいるリーダーたちだ。

今回の研修から、実践への計画に進んだ参加者たち

人々間の一致、平等、あらゆる人々の尊厳、それぞれの人が別々の責任を持つと同時に等しく大切な存在であること、といった根本を理解しないでは、本当の尊厳回復には至らない。今回の研修からこれらの理解が深まると、自分自身の人生や社会への貢献をトータルに見ることができるようになることを参加者は感じた。 私たちがそもそも、どのような存在として形作られているかという土台がはっきりすると、私たちに託された壮大な宇宙の歴史の目的の実現に近づくために、個人として、家族の一員として、地域共同体の一員としての責任が明らかになる。また、共同体として自分の仲間たちが、なぜ、この地域に置かれているかが理解できると、共同体としても何を訓練し、実践しなければならないかを考えられるようになっていく。

あわせて、参加者のリーダーたちは、個人としてもトータルに成長するための年間目標を立てるように励まされ、それぞれ作成してみた。また、近隣の村の参加者同士が一緒になって、地域の変革のための小さな働きの一歩という2012年の計画を立ててみた。 実際、村のことを考えると、厳しい現実と直面せざるを得ない。カースト差別、性差別、貧困、不衛生で不健康な劣悪な環境、不正や搾取が簡単に行われてしまう文字の読み書きの遅れなど…。ある村では、100世帯近くが暮らしているのにトイレは6つだけ。子どもが学校に行けないのは、最下層のカーストだと学校で差別されてしまうから。正式の教育を受けたお医者さんは、あまりの劣悪な状況に訪問はしてくれない…。 けれどもこの研修会で、みなで話し合ううちに、これからの数か月の間に小さな行動を起こそうということになった。

最も抑圧されたダリットの中でリーダーとなった彼らの声をまとめると、次のような地域のビジョンになった。

「最上層のブラミンも最下層のダリットたちも、健康と教育が保障され、互いに支えあい、共に自分たちに等しい尊厳を与えてくださった方を見上げ、地域のすべての人々のために、必要なものを作り出していく地域共同体となる」

この研修会で、みなが意見を交換できるための進行役のひとりだったラムスラットさんは、自分と同じように「声なき者」だったこの人々が立ち上がっていくのを支えたい、とあらためて強く確信したという。2012年の実践を決意し、次回の研修会を待ち望む2011年最後の研修会だった。

この研修会で決心されたどんな小さいことでも、その一つ一つが実っていく2012年の働きを日本から皆さまと共に祈り応援しながら、これから送られてくるレポートを楽しみに待ちたい。

[プログラム内容](#) [報告1](#) [報告2](#) [報告3](#) [年間レポート](#) [報告4](#) [報告5](#) [報告6](#) [報告7](#) [報告8](#)

[Page Top](#)

[Share](#) |

[ホーム](#) [活動内容](#) [FVIの特徴](#) [参加する](#) [寄付・献金](#) [お問い合わせ](#)

Copyright(c) Friends with the voiceless International All Right Reserved

